

## 幌延深地層研究計画 平成 26 年度調査研究計画 説明会 質疑応答の概要

- 質問) ① 計画書には人工バリアの横置きでの試験についての記載がある。これは幌延でやるのか。
- ② 人工バリア性能確認試験で設置する模擬体の重さは。設置すると岩盤が軟らかいため沈むのではないか。
- ③ 人工バリア性能確認試験で、模擬体の中にキャニスタの代わりに 100℃ぐらいの電熱器を入れるとのことだが、どのような電熱器を使うのか。
- 回答) ① 地層処分的人工バリアの埋め方には縦置きと横置きの 2 種類がある。研究開発として両方をスコープに入れているが、現在試験を計画しているのは縦置きの方法であり、今年度から実施する。横置きに関する試験についてはまだ検討していない。
- ② オーバーパックは非常に重く、模擬オーバーパック全体で 5.8 トンある。計算上は設置しても大きく沈むという結果は得られてないが、それを含めて地下の実際の坑道で実証していく。
- ③ 使用する電熱器の詳細は決まっていないが、オーバーパックの外側が 100℃未満となる条件で試験を行う。電熱器のワット数は変えられるもので、条件を変えて周辺の状況の変化を確認する。

質問) ① 4 月 24 日の野村茂雄理事の「もったいない」発言が新聞などにも出ているが、今回の理事の発言について、所長としての見解を伺いたい。

回答) ① その場にいなかったため詳細はわからないが、幌延町の方から議員が来られたということであり、且つ非公式の懇談の場ということで、研究計画の検討状況などを個人的な思いも交えながら、ざっくばらんに話したのだと思う。仮に「もったいない」という発言をしたとすれば、本人はもったいないと思っているのだろう。ただし、もったいなくても協定に従って、当然、研究が終われば施設は埋め戻す。地域の皆様への説明会という非常に重要な場で、幌延深地層研究センターの責任者である所長が発言しているわけであり、これ以上の見解はない。

理事の発言の前提として、三者協定は守りますと言ったと聞いている。例えば、雪まつりで、苦労して作った雪像も期間が終われば壊すことになる。その時に「もったいないなあ」と思いながら、壊すと思う。その気持ちを申し上げたと理解している。三者協定を反故にするようなことは一切ない。

質問) ① 理事の発言は、他にも、研究期間については「(残り) およそ 10 年」、埋め戻しについては「これを埋めてしまうと、やる気が無くなってしまう」、処分地の選定については「大体 11 月頃だろうか。6 月には国際的なシンポジウムを開い

て各国から学者を呼んで、処分についてのお墨付きをいただきたい」という発言までしている。野村理事が自ら 39 分間しゃべった話。

そういった発言があるということは、9 月の機構改革にこういうものが出てくると思われるが。

回答) ① 野村理事発言の詳細は存じていない。しかし、その後の北海道新聞のインタビューではそのようなことは一切言っていない。我々のトップである野村理事が協定を守らないような発言をすることはありえない。

今後の計画については、これから策定する段階。ある程度、試験の結果を見ないと次の具体的な計画は立てられない。次の中期計画の中で具体的に検討した上で、研究期間などに変更の必要が生じれば、三者協定に基づいて北海道および幌延町と事前協議する。

質問) ① 原子力機構の改革が議論されている最中で、地下 500m まで掘削することを口止めしていたという事実があった。協定でも情報公開は積極的に行うことになっているが、なぜ口止めしたのか。特に、500m 掘削は改革に関わる内容だと思うが、情報操作に値するのではないか。

原子力機構の改革は、過去に繰り返し指摘された動燃体質など組織的問題に対する改革も含め、体質を変えなければならないと言っているのではないか。信用してくださいと言っても信用できない。

② 回収可能性の研究を幌延でやりたいとも言っていた。深地層研究所を申し入れた時、「再取り出し・回収可能性についてはやらない」と言っている。その後の調査報告でも実施しないことになっている。それを守らないことに対して、非常に不信感を持っている。

回答) ① 現場の技術者としては、できるだけ多くの研究を幌延でやりたいと思っており、当初の計画どおり地下 500m で研究をやりたいと主張している。ただし、それが認められたわけではなく、原子力機構の中で検討しているところである。

口止めしたということではなく、検討の途中であり、9 月末までに計画としてまとまるということである。昨年 11 月に幌延町長から当初計画どおりに掘削するよう要請をいただき、我々もその方向で検討するとの意図だと理解している。

② 回収可能性については、先月決定したエネルギー基本計画に研究の必要性が示されている。原子力機構の研究開発として実施すべきものがあれば対応し、場合によっては幌延で試験などを行うということになるかもしれない。しかし、それはまだ計画としてまとまったものではない。当初計画では、地層処分に関する施工技術や人工バリアの技術など大まかな枠組みを示しており、細かな実施計画については、その時々状況を見て策定し、幌延町および北海道に説明をして了解をいただきながら進めている。

質問) ① 反対する方には、ある意味では、歯止めをかけるとか暴走を止めるとか、今まで原子力機構、その前の動燃時代から、隠す面があり、それを追及していた

だくのは大変ありがたいが、幌延町と北海道と三者協定を締結しており、幌延町長も三者協定を遵守すると言っており、北海道知事にも慎重な姿勢が見える。核廃棄物の処理については原発がゼロになっても必ず必要なものであり、幌延町で研究することに対して暖かい目をむけてもらいたい。

地下 500mまでの掘削が当初計画であり、掘らないとか、隠しているとか、そういうことはあたらなと思うが。

回答) ① 三者協定において、当初計画に沿って計画を進めていくとしており、当初計画を変更する場合には協議すると書いてある。当初計画には、例えば「地下施設については 500m以深まで整備する」、「研究期間については 20 年程度を考えている」と書いてある。それらについて今のところ変更する意思はない。

質問) ① メタンガス濃度が高くなった際、爆発を防ぐため、火元になる電源を落とすとの話があったが、電源を落とすと坑道の換気そのものが止まるのでは。

回答) ① メタンガス濃度が高くなる時は非常に局所的である。坑道内の岩盤が露出しているようなところからメタンガスが出て、一時的にその箇所の濃度が上がる。一時的にメタンガス濃度が上がった場合には、その周辺の電源だけを切る。エレベータ設備や全体の換気設備の電源は通ったままである。爆発する可能性のある空間の電源を落として、そこで爆発が生じないようにする。

また、停電などで電源が止まった場合には、すぐに非常用発電機に切り替わり換気は継続される。非常用発電機は 2 台あり、1 台の予備も備えている。

以 上